

みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 11 NO.3

(通巻 44号)

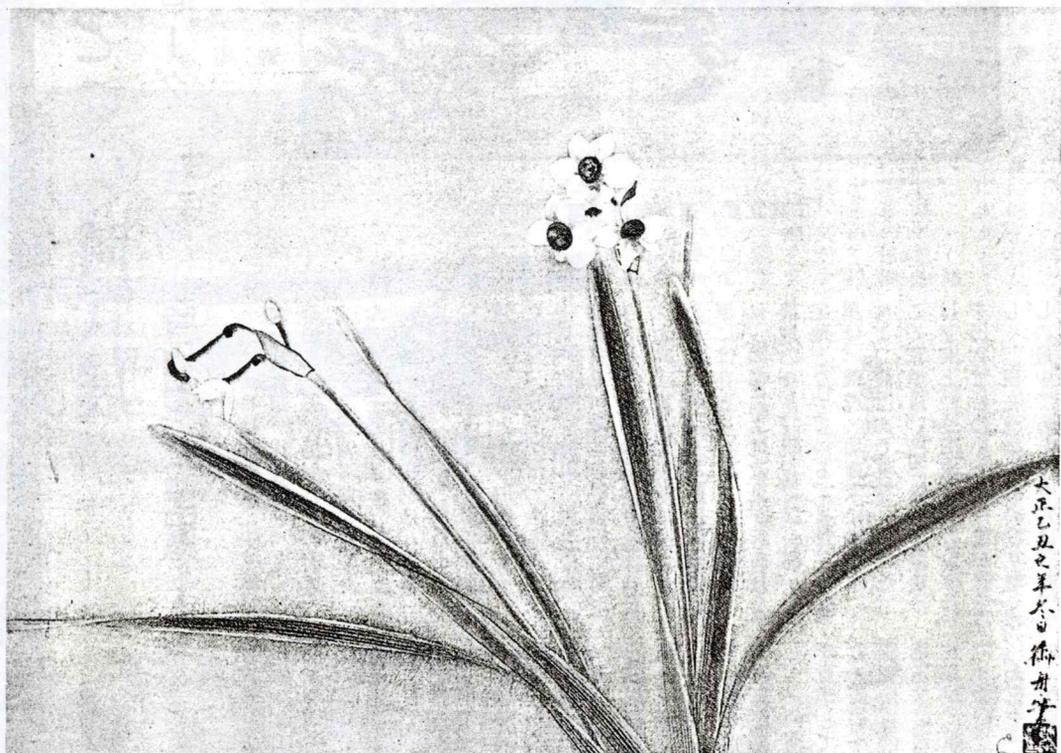
昭和60年 1月25日発行

編集・発行人 平野 肇

〒 260

千葉市中央港1丁目10番1号

☎0472-42-8311(代表)



速水御舟「水仙花」大正14年(1925年)横浜市蔵

御舟は、大正8年頃より精密描写に取り組みはじめ、ドイツ・ルネッサンスの写実画家デューラーに興味を抱く。

この作品は、大正14年の作であるが、水仙花の内面へでも迫まるがごとく凝視し、徹底した精密描写を行っている。画面いっぱいに広がった葉の一枚一枚が、すどく空間に向い、このかよわい花に力強い生命と存在感を与えている。この葉の表現に比べ、小さな白い花が印象的である。情感豊かな作品である。

観潮台

「細密な技法にた
め息、初日から

ぎわう」浅井忠記念賞展(一月)、「浅井と歩んだ画業をたどる」都鳥英喜展(四月)、「文化交流、親善めざし、色鮮やかにカナダを紹介」アルバート州現代美術展(六月)、「彫刻と版画の魅力満喫」美術館夏季大学(七月)、「二十一世紀への飛躍をテーマに公募」現代日本具象彫刻展(八月)、「バルビゾン派の九十九点一堂に、貴重な作品早くも話題」ミレー、コロ、クールベ展(九月)、「芸術の秋出前」千葉県移動美術館(九月)以上は、昨年実施した県立美術館の事業を紹介した新聞記事の見出しの一部である。昭和五十九年も各種の事業を展開したが、関係者各位の御協力により、それぞれ成果をあげて終了することができた。

美術に親しみたいという県民の要望にこたえられるよう美術資料の収集整備や展示事業の充実、県民アトリエ事業の拡充等に、館員一同更に一層の努力を重ねたい。

(糸賀茂夫)

みる (展覧会)

速水御舟とその時代展

—プロローグ 生家・蒔田家と茂原—



「広庭立夏」速水御舟 (第9回院展)

廣庭立夏

水御舟

速水御舟は、明治二十七年(一八九四)八月二日、父・蒔田良三郎、母・いとこの次男として東京浅草茅町に生まれた。本名、蒔田栄一。
御舟の生家蒔田家は、千葉県の茂原町二宮本郷村山崎(現、茂原市山崎)で代々醬油醸造を家業とする旧家であった。父・良三郎は、十~~三~~歳で上京、質屋を営み、のちに第百銀行系の実業貯蓄銀行に關与した。上京の際、資金作りのため土地・家屋が処分されたため、今は生家蒔田家は茂原には存在しない。屋敷跡地は、のちに土地改良が行われ農地となり、現在では一部が宅地となっている。また、家屋は、親戚・加藤家に譲渡されごく最近まで現存していた。この家屋は、柱が絵櫓で屋根は茅葺という旧家のおもかげを伝えていたが、老朽化が著しく、現在改築のため取り壊しの最中である。さらに、蒔

田家代々の墓(御舟の祖父の代まで)は、やはり茂原市山崎の薬王寺に今も残されている。

御舟と茂原

御舟は、父の郷里である茂原を訪れている。

大正五年四月小茂田青樹・吉田幸三郎とともに、親戚・西谷家に三日間滞在笠森観音を参拝し、一の宮附近を見学している。この際の小茂田

青樹からの札状が、最近まで西谷家に残されていたと言われるが、今は見出し出すことはできない。

大正十一年春、この時は親戚、加藤家に長期にわたり滞



現在の長屋門

在したと思われる。今も現存する大正十一年九月二十四日付加藤音吉宛御舟絵はがき(「広庭立夏」の出品絵はがき)によれば、「今春永らく御邪魔致し居り其節寫生に候門ノ

昭和六十年一月十九日(土)

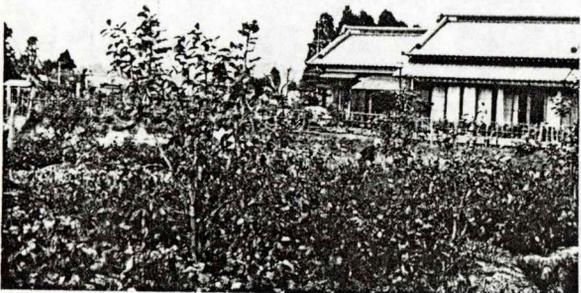
二月二十七日(水)



蒔田家代々の墓



蒔田家旧家屋（加藤家所有）



蒔田家屋敷跡

因此の程完成目下展覧會出陳中に御座候」とある。これにより滞在期間中に『広庭立夏』のための「門ノ図」が写生されたことが判明する。この門は、加藤家の近くに於いた鈴木家の長屋門であり、現在は改築され、現存しない。

この他、御舟がたびたび茂原を訪れたことは当然であろう。「父方の祖父の家で法事があつた時、私たちが一家ははるばる東京から広い田園の中にある茅ぶき屋根の家に行きま

した。そしてたどり着いたのは丁度夕日が既に丘陵の向こうに沈み、雑木林に囲まれたあちこちの田舎家に次々とランプの灯がともりはじめた頃だったので。はじめて見るその静かで美しい薄暮の田園風景に、私は心のときめく思いでしたが、これは、父が少年の時、はじめてこの地を夕方を訪れた時に得たその感懐を、また自分の子供たちにも味わわせようとして、わざわざその時間を選んでいたのである。後から母に聞

かされました。」（『アサヒグラーフ別冊美術特集・速水御舟一九八四』と御舟の次女・和子氏が思い出を記しておられる。御舟が、茂原の風景を好んでいたエピソードである。

展覧会について

御舟と茂原との係わりは深い。それ故、本館では、一度は展覧会として取り上げてみたい作家のひとりであった。しかし、御舟の展覧会は、過去に大規模なものが開かれていない。そこで本展では、御舟

を紹介するとともに、彼が活躍した明治四十一年（松本楓湖の塾へ入門）から昭和十年（御舟の逝去）に制作された、あるいは発表された代表的作家の作品を展覧し、近代日本画の展開を回顧しようとするものである。（前川公秀）

出品作家

山元春挙、土田麦僊、速水御舟、菱田春草、平福百穂、横山大観、今村紫紅、荒井寛方、石井林響、竹内栖鳳、小野竹喬、今尾景年、川合玉堂

美術講演会

（順不同）

演題 近代日本画における写実性と装飾性

講師 細野正信氏（東京国立博物館主任研究官）

日時 昭和60年1月27日（日）午後2時より

場所 千葉県立美術館講堂

美術を語る会

話題 御舟と茂原

話題提供者 佐藤信夫氏（茂原市文化財審議委員）

日時 昭和60年2月9日（土）午後2時より

場所 千葉県立美術館研修室（会費 無料）

第一回現代日本具象彫刻展

—全国から応募一〇四点—

昭和六十年二月二日(土)〜二月二十四日(日)

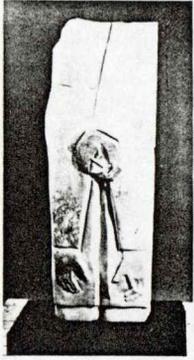
「青葉の森公園」

青葉の森公園は千葉市の農林水産省畜産試験場跡地につくられるもので、面積約53ヘクタール、下総台地の面影を残す典型的な地形で、樹林帯も豊かで、ムクドリ、キジなどが生息する都市部に残された極めて貴重な自然である。この公園は市民のレクリエーションの場、文化活動の拠点、防災の場として利用される予定で、カルチュアゾーン、ネイチャーゾーン、レクリエーションゾーン、スポーツゾーン、などに区分され、博物館、運動場、各種広場、植物園、研修棟などがそれぞれ配置される。

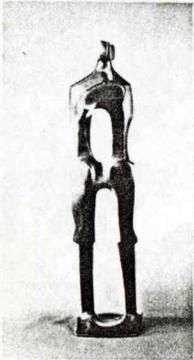
この「カルチュアゾーン」に「彫刻の広場」が設けられ



「飛べない沈黙」 鈴木 徹



「昼と夜」 高田 大



長谷川 昂

「安息」

大賞候補とし、その9点の中

「香風」 六崎敏光



「元気で」 梅原正夫

招待作家の作品約10体と公募展「現代日本具象彫刻展」により選考される大賞作約10体、計20体程度が昭和65年度までにこの広場に設置される予定である。

なお、招待作家のひとり北村西望の「天女の舞」は、公園が整備されるまで本館中庭に仮設置され、一般公開中である。

招待作家

本展に展示される招待作家と作品は次のとおりである。

- 大須賀 力 (50音順) 「杜の詩」
- 神野 義衛 「とこしえに」
- 北村 西望 「宇宙時代」
- 佐藤 忠良 「緑の風(エスキース)」

- 舟越 保武 「マリア・マグダレナ」
- 山本 正道 「アスペンのコラドII」

全国より104点の応募

北は関東(埼玉、茨城)から南は九州(福岡)まで、全国11都府県から104点の応募があった。最も応募の多かったのは、東京都(34点)、次いで千葉県(32点)、埼玉県(14点)の順であった。

応募数104点という数字は、彫刻という分野を考えると決して少ない数字ではない。

大賞に梅原正夫氏ら6作家

審査は去る昭和59年12月10日(月)午前10時15分より、審査員、小川正隆、嘉門安雄(審査会長)、弦田平八郎、富山秀男、中村傳三郎、本間正義、三木多聞各氏全員の出席のもと行われた。

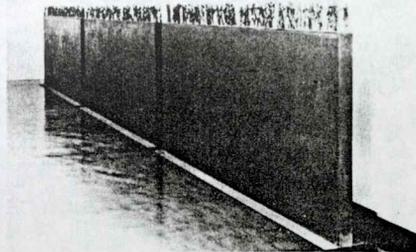
はじめに58点の入選作品が決定され、その中から9点を大賞候補とし、その9点の中

から最終的に次の6点が大賞に選ばれた。

- 作品名 作家名
- 「元気で」 梅原 正夫 (千葉)
- 「時の流れ・人の歩み」 酒井 良 (千葉)
- 「飛べない沈黙」 鈴木 徹 (東京)
- 「昼と夜」 高田 大 (神奈川)
- 「行列」 三木 俊治 (東京)
- 「香風」 六崎 敏光 (茨城) (50音順)

なお、以上の6点について審査会長の嘉門安雄氏は審査評の中で次のように述べている。

「(略)この大賞候補になった



「行列」 三木俊治

9点は、さすがに、はっきり何かを表明している。そこから6点を選ぶことが、入選をきめることより遙かに苦しかった……と、告白するほど、差がつけにくかった。もう一度言えば、候補作品それぞれに個性豊かで、あるいは蘭切



酒井良

れがよく爽やかだったり、あるいは造形ということをはつきりつかんで清潔である。(略)。

また、この6点の中から、第一回現代日本具象彫刻展実行委員会(委員長・今井正)は、本展開催期間中の観覧者のアンケートを参考に、「彫刻の広場」に設置する作品を選考することになっている。

入選者は次のとおりである。
▽山崎猛・茨城▽松本光司・愛知▽播間公次・大阪▽堀豊之・千葉▽高崎哲・東京▽広瀬友彦・東京▽濱野邦昭・山口▽酒本雅行・千葉▽本田悦久・千葉▽紀國輝喜・千葉▽

「時の流れ・人の歩み」

- 中村宏・神奈川▽西中良太・東京▽二ノ宮裕子・東京▽松原静雄・東京▽外岡秀樹・大阪▽加太肇江・千葉▽三島喜一・千葉▽間宮哲夫・東京▽久保浩・千葉▽脇谷幸正・千葉▽中村義孝・茨城▽石谷孝二・埼玉▽綿貫ひろ子・千葉▽東田勝男・東京▽松岡じゅね・東京▽高野佳昌・京都▽安倍千隆・東京▽平井一雄・埼玉▽杉山仁・神奈川▽山崎嘉久・東京▽橋井裕・京都▽青木三四郎・千葉▽桜井敏生・東京▽野崎窮・埼玉▽渡辺尋志・東京▽鈴木徹・千葉▽堀和道・福岡▽岡野重義・千葉▽坂井一任・千葉▽市村緑郎・埼玉▽本田貴侶・埼玉▽小田信夫・大阪▽黒須信子・東京▽久村進・東京▽宇野務・神奈川▽尾嶋正廣・千葉▽後藤敏伸・富山▽天野裕夫・神奈川▽松本雄治・東京▽島根紹・東京▽金田雄作・千葉▽小島靖成・千葉(受付順)
- 応募先(居住地)別点数
茨城5、埼玉14、千葉32、東京34、神奈川7、愛知1、富山1、京都2、大阪5、和歌山2、福岡1

計104点



御鑑賞中の常陸宮同妃両殿下

本館講堂において行われ、講師の島田紀夫氏(実践女子大学助教授)が「ミレー、クール、バルビゾン派」という演題で話され、また、美術を語る会が9月29日(土)二時より丹尾安典氏(早稲田大学講師)より「日本人とバルビゾン派」というテーマで話題提供があり、それぞれ多くの参加者があった。

―自然との交流―
ミレー、コロ、

クールベ展終る

特別展「ミレー、コロ、クールベ展」が去る10月10日盛況のうちに終了した。

本年開館十周年を迎え、特別展としては、本館では初めての国際的な展覧会であり、各方面で話題を呼んだ。

本展は、ミレー、コロ、クールベとヨーロッパ近代美術に大きな足跡を残した三人を中心に、バルビゾン派及び関連作家あわせて25作家の作品を展示した。

入館者は二七、〇一九名で、去る昭和五十二年度に開催した東山魁夷展に次ぐ入館者を記録した。また、金曜日には午後七時半まで開館し、利用者より、「勤めの都合で昼間来られないのでたいへんありがたい」との声があった。

また、去る10月7日(日)には常陸宮同妃両殿下がおいでになり、本展のほか、千葉市小中養護学校児童生徒作品総合展や県民アトリエでの実技講座を御覧になられた。

なお、本展に伴う美術講演会が9月16日(日)午後二時より

感謝のことば

企画展「カナダ・アルバート州現代美術展」についてカナダ・アルバート州政府東京事務所アイバン・バムステット氏より、「芸術交流」展の開催に伴ない、各方面からの協力や多くの人の親切に對しての感謝とこの展覧会が大成功であったと考えていること、また、この大成功によつて、カナダ・アルバート州と日本・千葉との「芸術交流」の目的が果たせられたのではないかと内容の礼状が届けられた。

また、身体障害者専用駐車場について、これまでよりも一台増設し、さらに、車いすの出し入れに便利なように幅を広げるなどの改善をしたことに対して、障害者問題研究会代表幹事大室皐氏より、次のような礼状が寄せられた。(略)県内会員及び関係者にも連絡し、車いすの身障者も安心して県立美術館を見学するよう周知方依頼致しました。すでに、一会員から美術館を見学させていただいたという感謝の電話がありました。(略)。

* * * * *

かたる・つくる

(美術を語る会・実技講座等)

実技講座

本年度の実技講座は、日本画、デッサン、洋画、版画、彫塑、陶芸、七宝焼、書芸、てん刻等9種計65日間の入門講座と、日本画、洋画、陶芸書芸等4種計29日間の研修講座を計画し実施してきたが本年度も、てん刻入門(第二期)デッサン入門(第四期)、書芸研修(第二期)を残すのみとなった。(12月末日現在)

そこで、本年度新設した陶芸研修講座と日本画研修講座に参加した方の声と作品を紹介する。



陶芸研修講座

また、受講された方々と和気あいあいの雰囲気の中で勉強できたこともうれしかった。今後もこのような講座を続けたい。

なお、できれば、もう少しゆっくり制作できるように日数をふやしていただくとありがたい。また、素焼や本焼を館の職員がやられたようであるがたいへんだったと思われる。受講生の中で、都合のつく者が交代でやるなどとしてお手伝いができればと思う。

『日本画研修講座を受講して』

近藤百合子

四週にまたがる七日間の講座が今日終了した。二十名の参加で始まった講座であるが最終日の今日は十五名の出席であった。年末にもか、わずら下全域からの参加者は全員熱心そのもので、それぞれの画題による20号の画布に向ってまさに格闘した感がある。最後に全員の画布をならべて先生からの講評をいただいた時には、どの絵もその努力がありありとうかがえるものであった。私は一年前に初心者

講習を受講し今回の研修講座にのぞんだのだが、受講生諸氏の熱気に圧倒される思いで初めての人物画は苦しかったが充実した日々であった。

講師の松原先生には各々の個性を尊重し、その技量に合わせたご指導を賜り大変貴重な体験を得ることが出来ました。心から感謝いたします。

今後も当館の立派な施設を一般に開放したこの様な講座を更に特徴あるものにして発展充実していただきたいと願っています。



近藤さんの作品

美術館協議会

去る12月20日、第三回美術館協議会が本館会議室で行われた。

館長よりこれまでの経過報告のあと、協議に入り、美術館の今後のあり方について話し合われた。

ボランテニア活動、作家の調査・研究、実技講座等について各委員より意見が出され特に実技講座については、年度を超えたもつと長期の講座が計画されてもよいのではなかなど活発に意見の交換があった。

美術館研究員会議

去る11月28日、本館会議室において、美術館研究員会議が行われた。九名の研究員の出席があり、これまでの研究の経過と成果、また、今後の研究のあり方等について発表があった。

なお、本年度、鈴木忠氏、村田哲朗氏、綿貫啓一氏、実藤充子氏が新しく研究員として館長より委嘱された。

実技講座案内

◎デッサン入門講座

期日 2月16・17・18日

講師 天野三郎氏

申込締切 2月2日

◎書芸研修講座

期日 2月19・20日

講師 浅見錦龍氏
申込締切 2月6日

山本不二夫氏 去年11月2日午前零時10分、脳血栓のため八千代市新八千代病院で逝去79才。

二科会理事、日本水彩画会理事、県美術会常任理事。

佐原市出身。大正15年、東京商大卒。昭和8年、二科展、日本水彩画展初入選。昭和15年、二科展特待賞。昭和41年同総理大臣賞。昭和53年勲五等瑞宝章受賞。その他、パリ・サロン・ド・コンパレーゾン、サロン・ド・トントヌ、メキシコ美術展招待出品。

日誌抄

- 9・1 特別展「ミレー・コロ、クールベ展」(10月10日まで)
- 9・12 千葉県移動美術館(佐原市中央公民館)
- 9・25 美術館協議会
- 10・2 関東博物館協会研究会
- 10・3 千葉県移動美術館(富里中央公民館)
- 10・7 常陸宮同妃両殿下御成り
- 12・7 第一回現代日本具象彫刻展公募作品搬入
- 12・10 同審査
- 12・17 資料審査委員会